慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本橋新乗物町史覚書 : 問屋と街 (福島義久教授追悼号)
Sub Title	Historical Study of Old Downtown in Tokyo, Case of Shinnorimono-cho, Nihonbashi (Memorial Issue of the Late Professor Yoshihisa Fukushima)
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	1997
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.40, No.4 (1997. 10) ,p.1-
JaLC DOI	
Abstract	本稿は現在の日本橋堀留町1丁目に昭和7年まであった「新乗物町」の歴史的素描である。明治になり人形町通りの背景が大きく変り,新しい洋反物を中心とした織物問屋が台頭して,周辺は急速に織物問屋街化が進む。その中でこの新乗物町という人形町通りに面した小さな町が,どのように変貌をとげてゆくかをみようとしたものである。これはこの数年の間に発表した日本橋界隈の問屋と街に関する著書・論文を更に発展させようと集めた資料の分析の覚書をもとにしたものである。最後に,新乗物町は,織物問屋街の一割に形成された下町の「町内社会」の典
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19971000-00685866

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第40巻第4号
1997年 10月

1997年9月9日掲載承認

日本橋新乗物町史覚書

——問屋と街——

白石　孝

＜要　約＞
本稿は現在の日本橋堀留町1丁目に昭和7年まであった「新乗物町」の歴史的素描である。明治になり人形町通りの背景が大きく変り，新しい洋反物を中心とした織物問屋が台頭して，周辺は急速に織物問屋街化が進む。その中でこの新乗物町という人形町通りに面した小さな町が，どのように変貌をとげてゆくかをみようとしたものである。これはこの数年の間に発表した日本橋界隈の問屋と街に関する著書・論文を更に発展させようと集めた資料の分析の覚書をもとにしたものである。最後に，新乗物町は，織物問屋街の一劃に形成された下町の「町内社会」の典型だったと結ぶ。これこそ近著「日本橋界隈の問屋と街」の1つのテーマだったかも知れない。

＜キーワード＞
江戸・町づくし稿，江戸の道筋，大問屋集団，芝居町への道，産業圏，下町生活圏，織物問屋街化，舶来織物，唐物商，寛保沽券図，別家退店，地価，表通り，商店街の形成，町内地主，町内社会

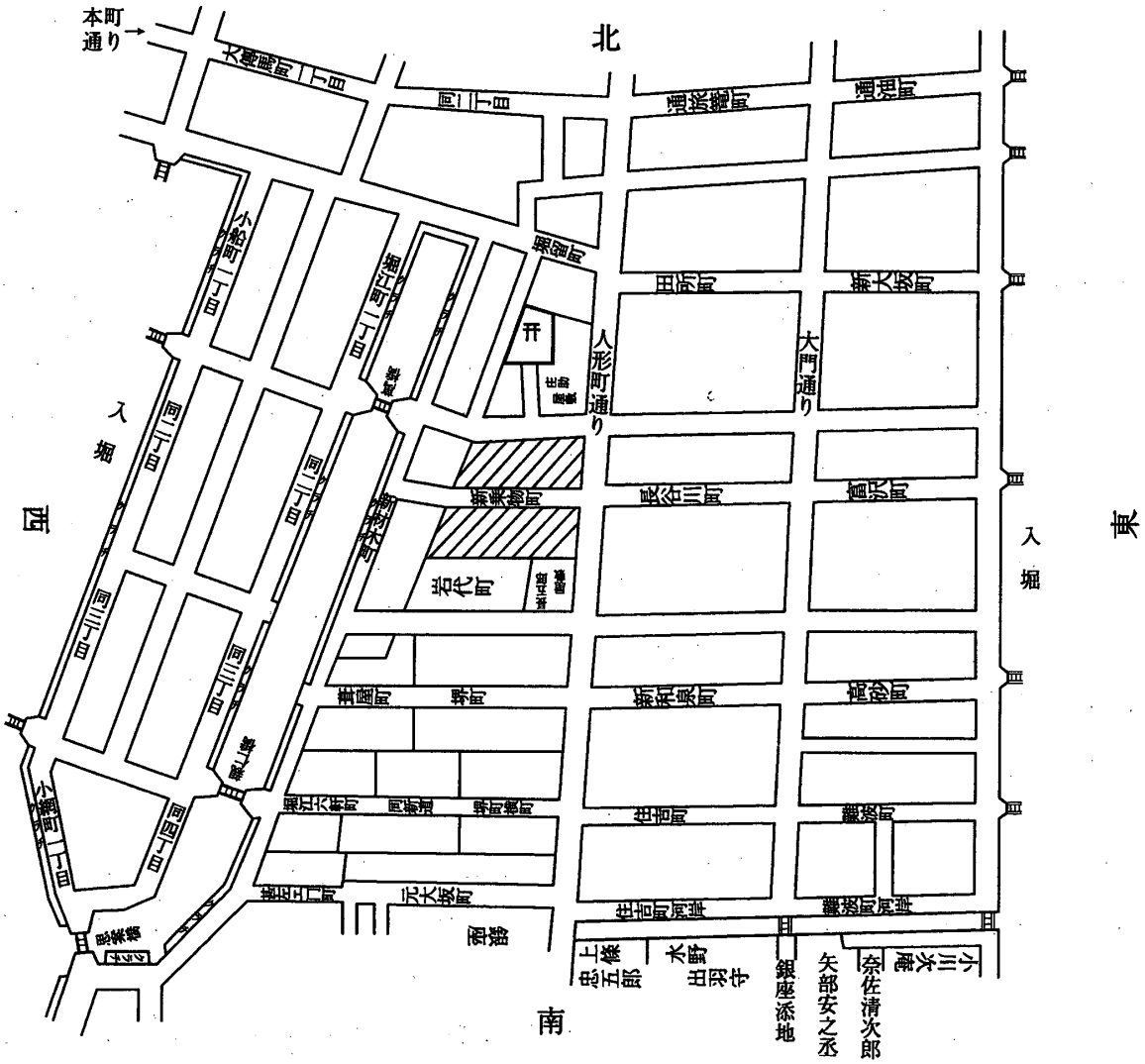
1．新乗物町由来記素描

新乗物町は人形町通りと新材木町との間にあった町で，江戸時代からの古い町の1つである。もっとも，「江戸・町づくし稿」によれば[1]，寛永図や正保図には町割りはしてあるものの，町名は出ておらず，承応図や明暦図に「のり物丁」とあり，寛文図からは「新のり物丁」と出ており，神田の「元乗物町」に対しての「新乗物町」であるといわれ，乗物を拵える者が多く住んでいたための町名という。これについては，中央区史の町の沿革でも，新乗物町は慶長年中に起立し，「江戸総鹿子名所大全」を引用して「長谷川町の西の町なり，のり物や多し」と記している[2]。多くの新乗物町の由来はこれに帰する。「寛天見聞記」にも「新乗物町は両側に乗物職人軒を並べ……」とある。確

1）岸井良衛『江戸・町づくし稿』上巻，青蛙房，昭和40年，pp.206-207。
2）中央区『中央区史』上巻 p.134。

かに「江戸買物独案内」をみると[3]，「御乗物師・中嶋屋清右衛門」の名が出ている。この中嶋屋清右衛門は，後述の寛保沽券図にあるように，この町に2ケ所の土地を持っていたし，それこそ乗物の拵え職人をかかえていたと思えるが，ただこのような町名の由来となる「乗物」職人がどの程度住んでいたかという確証はない。それに，何故このあたりにそうした職人が多かったかという理由・背景は明らかではない。むしろ，この町のすぐ西の新材木町に「乗物師」が2軒あり，この界隈は「江戸・町づくし稿」によっても，書物問屋や合羽油所とか仏教書を売る店のほか，浄瑠璃の太夫が住んでいたりするこれといった特色のない町だったようである。また，中央区史にある「嘉永4年

図1－1　人形町・大門通界隈（文久元年）



中央区京橋図書館「中央区沿革図集」（日本橋編）p.41より

3）花咲一男編『江戸買物独案内』渡辺書店，昭和47年，p.130,及び，「寛天見聞録」（寛政より天保に至るまでの世態の変遷を記したもの）。国書刊行会「燕天十種第三」より。

の諸問屋再興当時の町別諸問屋一覧表」では[4]，この町には，米屋が3軒，炭薪仲買1軒，紺屋1軒，版木屋1軒があったにすぎない。

さてここで新乗物町のロケーションを示しておこう。図1－1は堀留以東浜町川入堀までの道筋と町々で，文久元年のものである[5]。このあたりは明治・大正期でも大きな変化はない。更に図1－2は[6]，文化文政時代における本町通りやこれから南へ今の水天宮方面にむかう人形町通り，大門通り近辺の各町における商売一覧である。これに示されているように，大伝馬2丁目から通旅籠町・通油町にかけての本町通り界隈には，糸・針からべっ甲櫛・煙草・薬・醤油・酢・絵具・書物・白粉・紅・蠟に呉服・小間物等々の小売・問屋が集まっていた。特に通旅籠町の大門通り角には大丸呉服店があり殷賑をきわめていた。小伝馬町1丁目にゆけば，婚礼道具，箪笥・長持・塗物類の店があり，大伝馬2丁目の通りの南側には，鰹節屋・畳表・瀬戸物・雪踏の問屋が並び，江戸の日用品の商いはすべてこの界隈にそろっていたといえる。それだけにこの本町通りは大変な賑わいをみせていた[7]。それもその筈，この道筋こそ，江戸における主要な幹線の一つであったからである。大

図1－2　町別商売一覧（文化文政時代）

小伝馬町通り		（小伝馬町1丁目）婚礼道具屋・タンス・長持・塗物屋・絵具屋		（小伝馬町2丁目）書物・釘鉄銅物問屋・べっ甲細工・建具屋		（小伝馬町3丁目）釘鉄銅物・足袋股引・薬種・錫鉛問屋、鞠杏師・葛籠屋・古帳反古売買
本町通り	（大伝馬町2丁目）糸・針・書物・茶・提灯・塗物・紙・煙草・薬・墨筆・小間物・絵具・水油・扇・煙管・醤油酢・線香問屋	（大伝馬町3丁目）針・べっ甲・線香問屋・看板屋・金網屋		（通旅籠町）糸・白粉紅・針・書物・茶・繰綿・紙・釘鉄銅・下り傘・煙草・革烟草入・草履・扇・下り蝋燭・真綿問屋・武具・馬具屋・べっ甲櫛屋・呉服屋		（通油町）糸・針・書物・べっ甲櫛・白粉紅・茶・釘鉄銅物・合羽装束・竹皮・紙煙草入・蝋・下り蝋燭・打物問屋・筆墨硯・呉服・小間物・麻苧・煙管・人形・木綿・線香問屋・仏具屋・鼻紙屋・馬具・武具屋
	（堀留町1丁目）茶・紙・乾物・畳表・煙草・醤油酢・線香問屋・結納鰹節屋	（堀留町2丁目）釘鉄銅物・合羽装束・畳表・煙草・打物・瀬戸物・下り雪踏問屋	人形町通り	（田所町）白粉歯磨・紙・薬種・古手・水油問屋	大門通り	（新大阪町）釘鉄銅物・古手・錫鉛問屋・べっ甲櫛屋　（元浜町）合羽装束・古手・呉服・明樽問屋
	（新材木町）綿打道具・紙問屋	（新乗物町）書物問屋・乗物師		（長谷川町）呉服織物問屋・紅屋・額屋・菓子屋		（新大阪町）足袋股引・古手・呉服織物問屋・茶屋
		（堺町）革鼻緒卸		（新和泉町）薬種・絵具問屋・べっ甲櫛屋		

『十組問屋便覧』・『江戸買物独案内』より作成。
白石孝「日本橋堀留・東京織物問屋史考」p.19

4）中央区史前掲書に文化10年頃の江戸十組問屋便覧があるが，これには新乗物町だけが記載されていない。
5）中央区京橋図書館『中央区沿革図表』（日本橋編）平成7年。
6）白石孝『日本橋堀留・東京織物問屋史考』文眞堂，平成7年，p.18。
7）前掲書 p.20。

動脈ともいうべき東海道から中山道にぬける「日本橋通り」に匹敵するこの奥州道中道筋は，浜町川の入堀をこえて日本橋の東北の出口にあたる浅草橋御門に達し，千住往還の道に連がる人・物の往来繁華な街並みであった。しかし，これから人形町通りや大門通りに入った町々，堀留2丁目，田所町，新大坂町，長谷川町，富沢町となると，表のように，呉服・薬種・古手・小間物などの店があったにせよ，到底，通旅籠町や通油町の賑やかさには及びもつかぬものであった。いわんや新材木町や新乗物町にいたっては，問屋らしい問屋はほんのわずかしかなかった。それは人形町通りが本町通りのような江戸の外への往還の主要道筋とは違う，いわばこれからの横道にも似た通りだったからである。事実，人形町通りは北の先は神田川の柳原提で終り，南の方は大名屋敷によって外へ貫通していない道筋であった。特にこの通りから江戸の日本橋に次ぐ商業地であった築地，八丁堀・京橋方面にゆこうとすれば，小網町に出て鎧の渡しを使わなければならなかった。しかもそのあたりは昼間でも婦女子は物騒であったため，人形町通りからは，堀留入堀の親父橋か荒布橋を経て，江戸橋もしくは日本橋を渡るかするといった迂回を余儀なくされていたという。これについては拙著「日本橋界隈の問屋と街」で詳述しておいた。[8] 従って，人形町通りは商業的にはいわば袋小路的であり，南にゆけばゆくほど立地条件は悪くなる。これは後に述べる地価によく示されているところでもある。もっとも，新乗物町の眼の先の新材木町は，江戸時代の物資の搬出入水路であった堀留川入堀に接しているから，一見好条件にあるとみられるようが，確かに「江戸名所図会」にあるように，この河岸には土蔵倉が立ち並んで，荷の搬出入に賑わいをみせていたにせよ，物資の流れは，新材木町―新乗物町―人形町通りというよりは，堀留北の堀留町1・2丁目―大伝馬町―本町通りであったとみなければならない。これは当時の大問屋集団が大伝馬町1丁目の大木綿問屋を中心に本町通り界隈にあったことからも当然のことであろう。

更に，新乗物町という町のロケーションを考える場合，そのすぐ南隣り近くにあった堺町・葺屋町の芝居町の存在を無視しては語れまい。この一帯の芝居町は文化文政の江戸文化の爛熟期に栄え，芝居小屋の周囲には華やかな茶屋が立ち並び，浄瑠璃，操り人形芝居が軒をつらねていた。まさに江戸庶民の夢の町，風俗文化の創出センターでもあった。人形町通りという呼び名も，この操り人形芝居やこれを作ったり修理したりする人形師がいたこと，また土産物の人形を作っていた家が多かったことなどによるものとみられている。[9] それ故に本町通りから入った人形町通りは「芝居町への道」といってもよい。[10] しかし，衆知のように，天保12年10月7日，堺町の中村座から失火し，市村座を始め，元大坂，新和泉町，それにこの新乗物町なども類焼し，芝居は遂にこれを機に浅草の猿若町に移転させられるのであった。いずれにしろ，芝居町は約200年余もこの地に存続し

8)　白石孝『日本橋界隈の問屋と街』文眞堂，平成9年。
9)　宇井善八『日本橋繁昌記』日本橋協会，大正2年，p.131。
10)　白石孝前掲書2－4，「芝居町への道」。

ていたから，その気風は隣接していた町々に色濃く残されてゆくことにもなる。新乗物町もその1つである。

このような新乗物町は明治・大正・昭和にかけてずっと同じ町名であったが，[11] 明治5年に「長五郎屋敷」を合併する。それは新乗物町とその南隣りの堺町との間で，芝居町の「楽屋新道」にはさまれた約457坪の小さな1角で，[12] 雪駄屋などがあったという。後述の新乗物町の地番1～3がこれである。名主は福島三郎右衛門であった。

2．明治期の人形町通り界隈と新乗物町

明治になって，この町は次第にその姿を変えていった。この背景になったのは，人形町通り界隈全体にかかわる環境の一大変化であった。

まず，第1に，人形町通りの南にあった武家屋敷がなくなり，新しい下町が誕生したことである。[13] これは人形町通り界隈の商業圏の拡大を意味するものにほかならなかった。しかも，明治5年に水天宮が三田赤羽橋より移転してきて，新しいこの辺の町―蠣殻町（現在の人形町）に門前市的賑わいをみるに至ったのであった。当然この地域の人口も増加した。東京府志料にある明治5年の蠣殻町1・2・3丁目の人口は，わずかにまだ1459人にしかすぎなかったが，明治16年には，「日本橋区史」によれば，実に10,156人に膨張している。[14] 戸数も同様に372から3587と約10倍に増え，これにともなって商店の数も激増をたどる。しかも，この町には，米穀取引所ができ，多くの仲買商がここに集まり店を開いたのを始め，明治11年には兜町に東京株式取引所が設立されるなど，活気に溢れた町に変貌を遂げていったのであった。図2―1は明治31年の「日本商工営業業録」[15] より作成した蠣殻町の各種営業店分布である。これには米穀仲買や商品取引仲立業を除いてあるが，まさに，それはこの頃には様々な商店が密集する町になっていたことを示しているといってよかろう。これが，もちろん，人形町通りの町々の商業活動に大きな影響を与えたことはいうまでもない。そして，それは明治から大正にかけての下町生活圏の形成を現わすものであった。

第2は明治5年に鎧橋が完成して，築地・八丁堀方面や京橋と人形町通りが直結するに至ったことである。もはや渡し舟を利用することもなくなり，それまでのように迂回する要もなく，往来が簡便になったことは，人形町通りに多大な利点を与えるに至ったといわなければならない。

かくして，人形町通り界隈の商業的価値は見ちがえるように上っていった。これにより，前述の

11）日本橋区『日本橋区史』第1冊，区役所，大正5年，p.218。
12）長五郎屋敷の坪数は前掲『中央区史』町の沿革 p.209. による。
13）拙著前掲『日本橋界隈の問屋と街』四の3。
14）東京都『東京府志料』1，都政史料館，明治6年。前掲『日本橋区史』第1冊，区役所，大正5年。
15）井出徳太郎編『日本商工営業録』日本商工営業録発行所，明治31年。

図2－1　明治31年営業店（米穀仲買・商品取引仲立業を除く）

人形町通り　大門通り　〔(数字)は番地〕

蠣殻町一丁目

米穀取引所

待合・鮨・料・綿卸・陶卸・料・履卸・印・酒・料・料・料・西料・待合・印・待合・印・宿・炭・待合石油卸・瀬卸・洋品・履・酒・瀬・質・米・印・宿・印・米・炭・魚大小卸・米・炭・牛乳・牛乳・質・糖卸・磨砂卸・運・瀬・茶・運・道具・米・酒・瀬・瀬・炭・油・米

蠣殻町二丁目

(14) 商品取引所 横浜

瀬・乾・紙卸・ガ卸・料・瀬卸・酒卸・料・呉・質・料・料・菓・料・印・料・油・酒・待合・土木・待合・染・質・乾卸・畳・米

(10) 待合・漬物・貸布団・絵草紙・履・煙・牛乳・小間物・菓・料

(10) 呉・履・櫛

(8～9) 菓・糸・糖・魚・毛糸卸・乾・紙・履・時・糸卸・汁粉・足袋・薬・質・料・酒

(6～7) 米・履・呉・酒・蒲鉾・菓卸・菓・乾・飲物

(2～3) 洗

(4) 炭・宿・米・小間物卸・料・煙・足袋・呉・料

(1) 鋼鉄卸・運・履卸・材木・宿・米・質・魚・古着卸・土木・雑穀卸・宿・寝・炭・米・煙・鉄・瀬卸・畳・本卸

(15～16)

足袋・甘酒・荒・洋小・傘・足袋・建具・紙卸・雑・家具・時・茶・肉・瀬・米・酒・太物卸・料・履・指物・米・大工・料・酒・炭・古道具・米・芋・魚・呉・古物・洗・古道具・染・洗

(17～26)

質・質・料

松島町

(1～5)　油・建具・履・薬・金物

(26～35)　化・綿

(36～47)　米・酒・鉄

(8～9)　米・質・弁当・質

(12～13)

材木卸・宿・質・料・米・米・酒・洗・酒・米・炭・土木・洋紙・紙卸・炭・待合

蠣殻町三丁目

(1～3)　機・酒・米・米・茶筒卸・糖・宿

(4～10)　呉・待合・糖・待合・炭・印・鋼鉄

(11)　宿・石材卸・土木・待合・質・料

商品取引所

「日本商工営業録」より

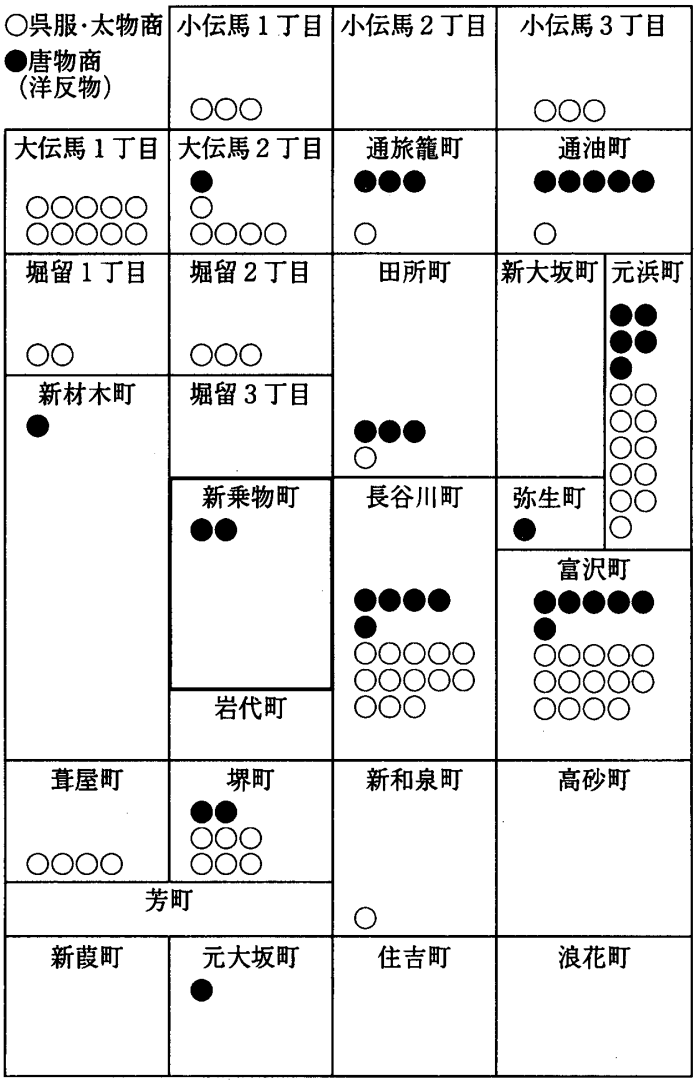
白石孝「日本橋界隈の問屋と街」p.126。料＝料理屋，印＝印刷屋，瀬＝瀬戸物，煙＝煙草屋，時＝時計屋，荒＝荒物屋，洗＝洗張屋，洋小＝洋品小売，運＝運送，西料＝西洋料理など。

ような本町通りと比較して，どちらかというと，三流の商業地としてみられたこの界隈は，今や繁栄を約束された商店街に変わっていったのである。それまで格別注目されることもなかった新乗物町も，明治5年の人口が364人だったのが，明治16年に537人と大幅に増えていったのも，この一帯の町々の変化を投影したものであった。しかしより重要な町の変貌の背景は，人形町通り界隈が明治になって急速に織物問屋街化したということである。江戸時代と違って衣服の身分規制もなくなり，大伝馬町の木綿問屋仲間のような規制もなくなった新しい社会で，織物の新興問屋が次から次に生まれていったし，伝統的な織物に対し，金巾とかモスリンといった舶来ものが市場を拡大しつつあり，これを扱う問屋が発展をみせるに至った。これについては，すでに拙著でも詳しく述べたが[16]，このような傾向は早くも明治10年代に現われていた。事実，明治13年には呉服太物商や舶来

16)　拙著前掲『日本橋堀留・東京織物問屋史考』三。

織物を扱う唐物商が，特に元浜町，長谷川町，富沢町に増加をみせる。図２―２は，この界隈の町別にみたその分布である。いわば，以前は三流商業地とみられていたこの界隈に織物商が群生し始めたのは，なんといっても注目すべき変化といわなければならない。そして，新乗物町にも唐物商が２軒現われている。15番地の上田清兵衛店と白石甚兵衛店である。ただ，この町には表２―１のように，人形町通りに面したところの地番，３・４・15・16には，半襟や袋物，手遊物のような小間物とか，下駄，草履，荒物，漬物屋があったという点では，織物問屋街の１部をなすような町ではまだない。しかし，明治27年頃になると，図２―３のように[17]，この人形町通り界隈は，文字通り

図２―２　明治13年人形町通り界隈織物商町別分布



「東京商人録」より作成

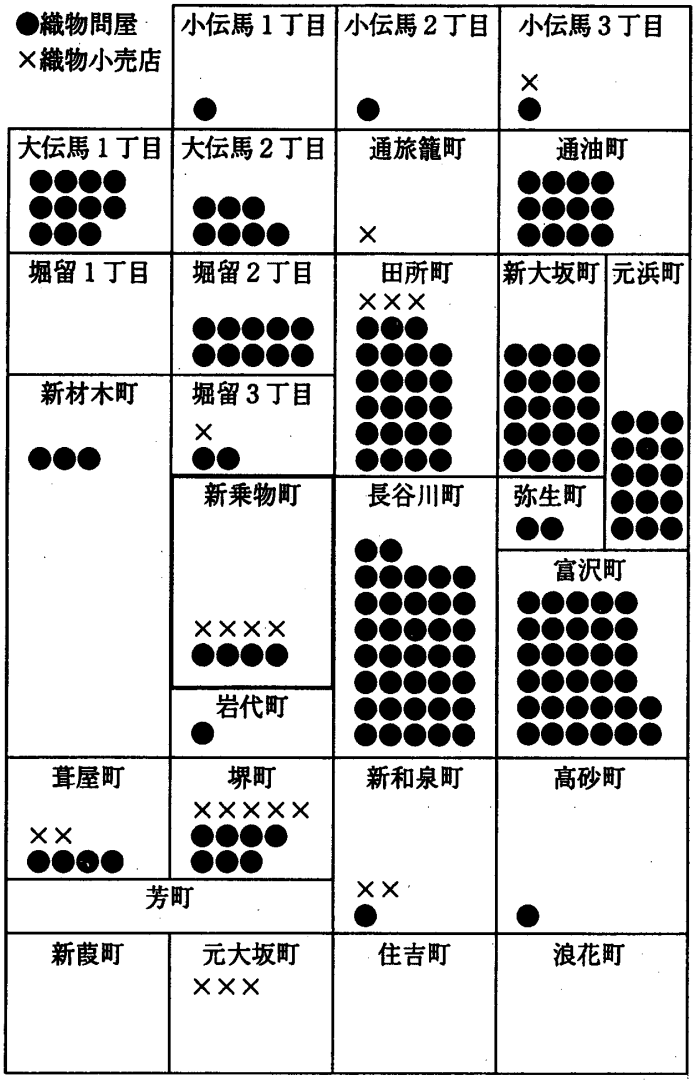
17）　賀集三平編『東京諸営業員録』賀集三平，明治27年。

表２－１　明治13年新乗物町商店名

地番	業　種	商人名	地番	業　種	商人名
3	半襟商	田山孫七	15	唐物商	上田清兵衛
3	下駄商	小宮喜右衛門	15	〃	白石甚兵衛
4	鉄物商	鳥居新兵衛	15	矢建商	大友兼蔵
4	草履商	山崎太吉	15	袋物商	根本仁兵衛
4	漬物商	伊東甚五郎	16	舶来小間物商	伊森藤兵衛
4	手遊物商	狩野可通			
9	医　師	草刈啓徳			

明治13年「東京商人録」より作成

図２－３　明治27年人形町通り界隈町別織物商数



「東京諸営業員録」より作成

の織物問屋街になっていった。それにともない，新乗物町にも織物問屋が4軒，呉服店のような織物小売店が4軒みられるに至る。しかも，この頃から益々，人形町通りは賑わいをみせ，更に商店の数も増えてゆく。表2―2は，明治33年における新乗物町の商店である。これをみると，新乗物町には，人形町通りに面しているところに数多くの店が並ぶようになっただけでなく，横路に入った10番地から14番地までのところにも大小様々な店が出来ている。なかでも，めだっているのは，呉服店や洋織物問屋であり，表に○印で示したように14店を教える。特に金巾やモスリン，綿ネルの店が多いが，これらは当時の代表的な成長織物品であり，これを扱う店が飛躍的に発展してことを考えると，この新乗物町もまたこの時代を象徴的に示す町だったといってさしつかえあるまい。なお，これらの商品や問屋の発展経過については，筆者の2つの論文を参照されたい。[18)]

それでは，これらの新乗物町の織物問屋はどの程度の店であったろうか。

「明治期日本全国資産家地主資料集成」には業種別の日本橋商工人名が載っており，そこに売上税が附記されている。[19)] かつて石井寛治氏はこれから東京の織物問屋91店につき，売上税から売上高

表2―2　明治33年新乗物町商店名

地　番	商店名（店主）業種	地　番	商店名（店主）業種
①	西脇新次郎呉服店	4	嶺井清造越後屋卵乾物店
1	越塚さく万安料理店	5	桑原惣助松屋木炭店
2	大川吉兵衛伊勢屋帳簿店	⑤	榎本政四郎やまと料理店
3	岩崎岩蔵東尾毛糸店	⑩	西沢善弥近江屋金巾卸
3	坪井重蔵尾張屋蒲焼店	⑪	小川祐治八幡屋旅人宿
3	上田浅吉勝浅袋物店	⑫	尾崎勇助支店京呉服卸
3	小宮喜左衛門伊賀屋下駄店	⑫	大谷弥平富田屋綿ネル卸
④	市川栄治郎近江屋金巾卸	⑬	古田善七太物卸
4	西川勇吉金物店	⑭	市田文次郎近江屋呉服帯地
4	加藤政治郎木京屋足袋店	⑮	吉岡伊三郎上総屋呉服太物卸
4	勝川文吉際物店	⑮	中根リウ山本屋呉服店
4	高梨萬造萬屋米店	15	青木三五郎宝泉堂筆店
4	高島福太郎洋小間物店	⑮	白石甚兵衛洋織物卸
④	中村貞作毛織物卸・小売	⑮	須田鉄次郎洋織物卸
4	野村清左衛門上川屋洋織物卸	⑯	白石彦太郎ネル卸
4	木島福太郎洋小間物店	16	栖原文之助木村屋質店
4	伊藤庄二郎伊勢屋漬物店		

計33店

「日本商工営業録」より作成，○印は織物商

18)　白石孝「輸入代替工業化の史的事例研究―明治大正期のモスリン産業」『駿河台経済論集』第5巻第2号や「明治期の洋反物輸入と東京織物問屋」『慶應経営論集』第14巻第1号。
19)　渋谷隆一編『明治期日本全国資産家地主資料集成』柏書房，大正5年。

を推計して，ランキングを付けたが[20]，本稿では，売上税から売上の規模を測ることができるとみて，この界隈の町毎の織物問屋を5段階に分けて，そのクラス別の店数を示すことにした。表2－3がそれである。売上税200,000円以上をA，200,000円未満～100,000円をB，100,000円未満～

表2－3　人形町通り（大門通り含む）織物問屋営業規模クラス（明治31年）

町名＼クラス	A	B	C	D	E	計
大伝馬町2丁目	0	0	1	2	3	6
通旅籠町	0	0	0	3	4	7
通油町	0	0	2	1	2	5
堀留2丁目	2	1	2	2	0	7
田所町	3	1	3	7	3	17
新大坂町	1	3	0	6	1	11
元浜町	1	1	2	2	9	15
弥生町	0	0	1	0	3	4
長谷川町	2	1	5	11	5	24
富沢町	3	4	9	8	4	28
新材木町	1	0	1	1	3	6
新乗物町	1	0	1	2	4	8
計	14	11	27	45	41	138

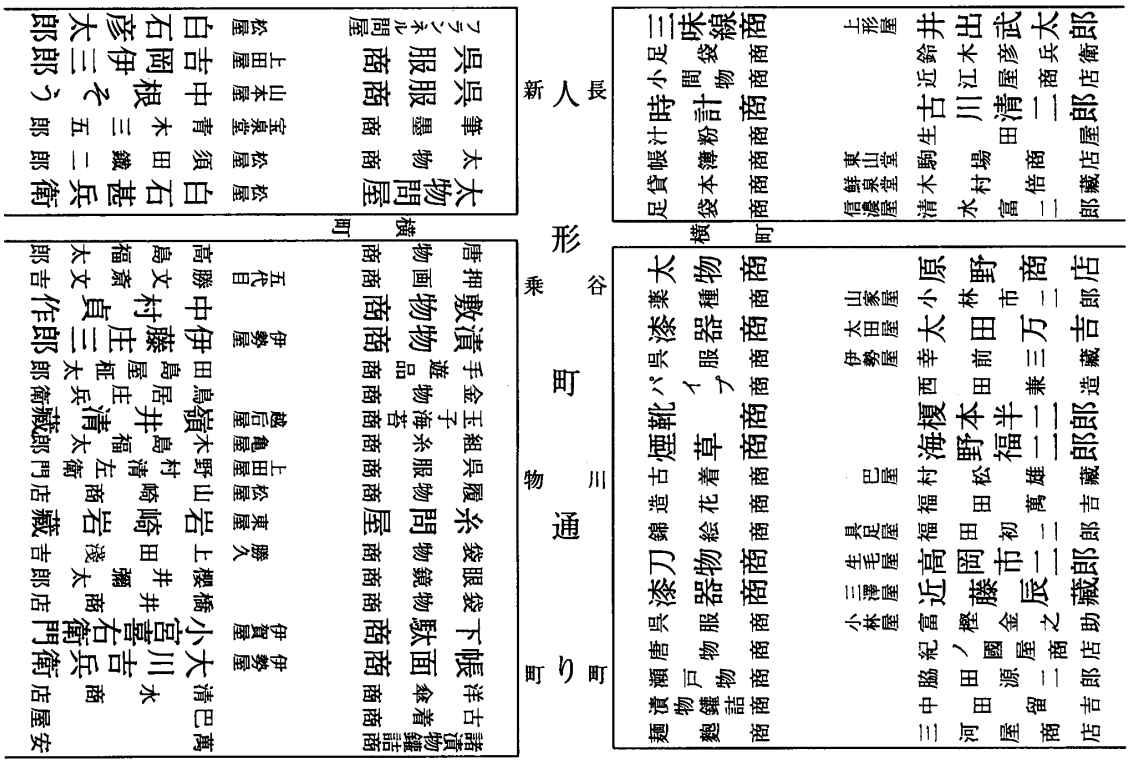
Aクラス　人形町通り界隈織物問屋			
屋号・扱い品	店名（店主）	売上税	町名
		円	
薩摩　呉服太物金巾	薩摩治兵衛	996,000	田所町
近江屋　金巾木綿	前川太郎兵衛	693,000	堀留町2丁目
杉村　洋反物	杉村甚兵衛	578,000	新材木町
丁子屋　呉服太物	小林吟右衛門出店	341,000	堀留町2丁目
丸桝　呉服太物	市田弥一郎	313,400	田所町
亀屋　呉服太物	山下忠七郎	295,080	長谷川町
布屋　呉服木綿	外村宇兵衛支店	278,400	新大坂町
近江屋　洋反物	西村与兵衛	267,660	長谷川町
伊勢屋　呉服木綿	稲村源助	267,000	富沢町
亀屋　呉服木綿	大久保源兵衛	230,560	富沢町
松屋　洋反物	白石甚兵衛	219,000	新乗物町
富屋　洋反物	井上市兵衛	216,680	富沢町
佐野屋　呉服太物	菊池長四郎	208,912	元浜町
三河屋　洋反物	山崎作次郎	205,200	田所町

「日本橋区商工人名」及び明治33年「日本商工営業録」より作成（境町，新和泉町，大伝馬1丁目除く）

20）山口和雄編『日本産業金融史研究』石井寛治稿第1章，東京大学出版会，昭和49年，p.58。

60,000円をC，60,000円未満～30,000円をD，そして30,000円未満以下をEとしたものである。表の注記でことわったように，大伝馬1丁目と堺町・新和泉町を除いてあるが，合計は138店である。この中でAクラスに入る店は14店であるから，全体の10.1％にすぎないが，これが大店といってよいクラスの問屋である。これでみると，旧問屋街であった本町通り界隈よりも，田所町，堀留2丁目，長谷川町，富沢町のような界隈に大店が多かったといわざるを得ない。これはすでに度々指摘したような人形町通り界隈の発展を示すものであった。更にこの下表に，Aクラス14店のリストをかかげておいた。これをみるといくつかの特徴をあげることができる。その第1は，これらの大店のうちの半分は金巾やモスリンといった洋服物を主として扱う店であったことである。しかも薩摩・前川の両店は金巾木綿店である。それは舶来の金巾の市場がいかに大きかったかを示すといえよう。第2はこの薩摩・前川を始め杉村，小林，市田，西村，外村はいずれも近江出身であったことである。すでに筆者もこの界隈と近江商人との関係を著書で記したことがあったが，これによっても[21]，明治期の織物問屋をみると，いかに近江商人の進出が著しいものであったかがわかろう。第3はこの表でも示されるトップクラスの薩摩・杉村はいずれも近江の丁子屋小林吟右衛門の江戸店の番頭で，別家させられて独立した店だったということである[22]。しかも，いずれも後述する

図2－4　人形町通り新乗物町商店街並み（明治33年）


人形町通り
新乗物町
長谷川町
大丸屋
宮吉
薩摩
前川
杉村
小林
市田
西村
外村
大出
武井
清水
大三郎
彦太郎
伊勢
根岸
白石
吉田
中村
石井
兵衛
白石
菅原
須賀
青木
鈴木
五二郎
衛門
大丸屋
宮吉
薩摩
前川
杉村
小林
市田
西村
外村
大出
武井
清水
大三郎
彦太郎
伊勢
根岸
白石
吉田
中村
石井
兵衛
白石
菅原
須賀
青木
鈴木
五二郎
衛門
足袋
貸帳
汁粉
時計
小間物
足袋
本舗
粉計
商
足袋
鮮魚
東京
泉屋
清水
木村
駒場
生田
近江
鈴木
井上
信濃
泉屋
富沢
倍二
商兵
衛店
藏郎
足袋
麺類
漬物
鍋物
詰合
商
唐戸
物商
瀬戸
物商
呉服
物商
錦織
造商
漆器
物商
漆器
物商
呉服
物商
煙草
着物
絵商
草花
着物
煙草
商
漆器
物商
呉服
物商
唐戸
物商
麺類
漬物
鍋物
詰合
商
三中
河田
屋留
商
臨
田
源
紀
ノ國
屋
富
金
之
助
商
二
商
店
吉
郎
三
河
屋
商
店
吉
郎
藏
造
吉
郎
藏
造
吉
郎
藏
造

ように，新乗物町に土地を持ち，杉村は特にその表通りの15番地を松屋白石甚兵衛にゆずり親密な関係を結ぶのであった。松屋白石甚兵衛店はモスリン問屋として急速に成長し，新乗物町の表通りに土蔵造りの店をかまえるまでになっていた。

ここで明治33年当時の新乗物町の表通りの街並みを図２－４（p.11）でみておこう。[23] 人形町通りの対面東側は長谷川町である。そこには数多くの種類の日用品（生活関連）の店が並ぶ。その中で織物問屋は散見する程度にしかすぎない。長谷川町などは前述のように織物問屋街といってよかったが，これは表通りから一本後ろの街並みであった。それ故に，この界隈は典型的な下町生活圏をもつ織物問屋街といえるであろう。新乗物町はなかでもこの表にあるように，問屋と日用生活品小売りとが混然一体となっている「町内」を形づくっていた町であった。

３．新乗物町の地主と商人達

それでは，明治期の新乗物町の土地は誰が所有していたのだろうか。またそれについて，この町はどのような特徴をもっていただろうか。

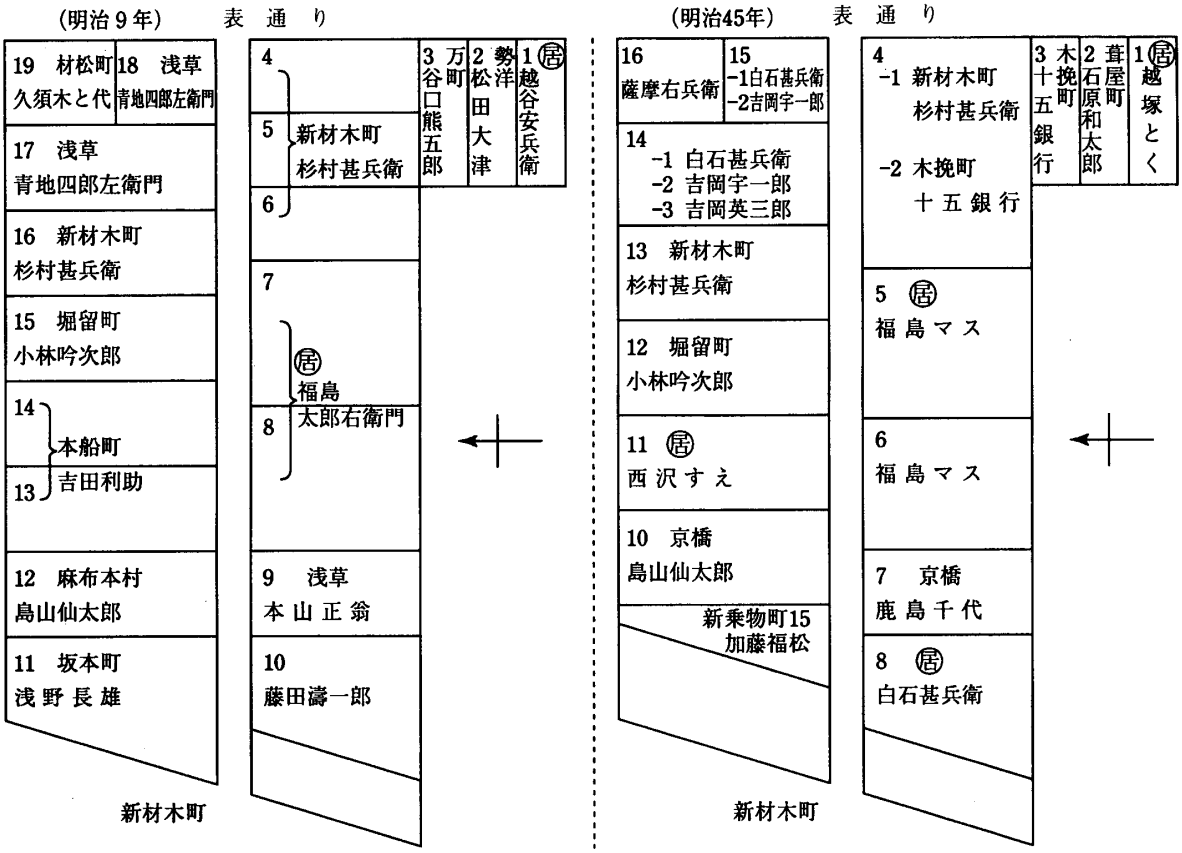
図３－１は明治９年と明治45年の新乗物町の地主である。明治９年の地主名鑑[24]の地番と明治45年の地籍台帳[25]のそれとは，地番改正で異なっているが，図では便宜上，大体の位置関係を照応するように描いてある。

江戸時代は，すでに述べたように，このあたりはそれほど商業的賑わいをみることもない町であった。その故もあってか，寛保沽券図によれば，20坪当たり平均地価は97両程度であった。当時，大伝馬町１丁目あたりになると角地は500両，平均でも336両，富沢町でも平均161両，新材木町148両であったことを考えれば，かなり安い土地ということができる。その頃の地主は[26]，明治９年の地番にあわせてみると，１番地は地掛蠟燭問屋の井筒屋庄兵衛，２番地は呉服問屋両替の伊勢屋甚十郎，４・５・７番地は札差の仙波太郎兵衛，６番地は小舟町組塩干肴問屋熊野大右衛門である。この町の北側の表通りの18番地と17番地は浅草の札差伊勢屋四郎左衛門[27]であった。16・15番地は絵具染草円屋伊勢屋弥左衛門，14，13番地あたりは，すでに述べた「御乗物師」の中嶋屋清右衛門である。こうしてみると，地主は札差，呉服・海産物・薬種の諸問屋のような富商ということになる。

しかし，明治になると，地主が一変する。明治９年の図では，18，17番地の伊勢屋四郎左衛門が

23） 西川純二郎編『東京営業便覧――名八百八町西側一目』博報堂，明治33年。
24） 『地主名鑑』東京各書林，明治９年９月21日。
25） 『地籍台帳』東京市，明治45年。
26） 地主名は前掲『寛保沽券図』職業は白石調べ。
27） 享保９年の「札差條目帳」によると天王町組として瓦町10人のリスト中にあり，元治元年には天王町組２番組の青地四郎左衛門の名となる。浅草区史編集委員会『浅草区史』産業編，昭和８年，p.49。

図3－1　新乗物土地所有者の推移（番号＝地番，(居)＝居住者）



「明治9年地主名鑑」及び「明治45年地籍台帳」より作成

青地の姓でそのまま地主として残るが，この町の主なところに織物問屋の大店が土地を持つようになるのであった。なかでも新材木町の唐物商杉村甚兵衛が，この町の南側4・5・6番地と北側表通りの16番地の土地を取得しているのが注目されよう。初代杉村甚兵衛は文久8年に京都の近郊で近江出身の両替商の次男として生れ，24,5歳の時に江戸に出て，丁子屋小林吟右衛門江戸店に奉公し，約11年の末，江戸店で通勤できる身分にまでなるが，江戸に下向してきた主人吟右衛門の意にそまず，弘化3年に別家退身させられるに至り，甚兵衛は新材木町に店舗をつくり，唐物商を開業し，輸入織物で巨額な富を手にする。明治10年に甥が養子となり二代目を襲名し，商いの重点を洋反物へと移し，明治20年代には「堀留の丁甚」といわれる洋反物問屋のリーダーとなる明治期の新興大資産家の一人である。杉村については拙著に詳しく記してあるので参照されたい。[28] 15番地の小林吟次郎というのは，杉村の主家小林吟右衛門の弟である。19番地の地主は久須木と代だが，衆知のように，久須木は三河商人として江戸入した旧家で，大伝馬町1丁目で木綿商を営み，代々「七左

28)　白石孝前掲『日本橋堀留・東京織物問屋史考』pp.77-80及び前掲の2つの論文参照。

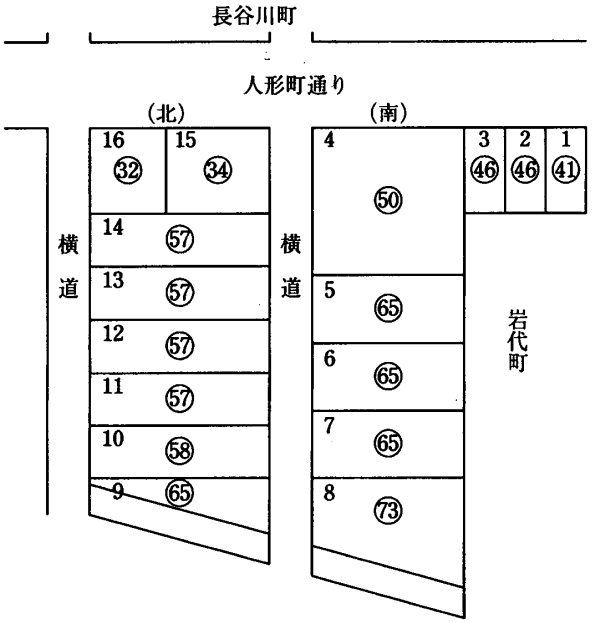
衛門」を名のり享保には白子組仲間として重きをなした「升屋」である。ただ，この土地は，明治6年の沽券図では，小野善次郎が所有していたもので，小野組の瓦解のあと，久須木の所有となったものである。7・8番地の福島太郎右衛門はすでに述べた旧幕府時代の名主である。14・13番地の本船町の吉田利助は和泉屋という倉庫業で，12番地の島山仙太郎は主に芝に土地を持つ資産家だが，日本橋ではここだけの地主である。何故ここだけの土地を持ったのか残念ながら知るすべがない。

このように，明治9年頃の新乗物町の土地をみてくると，居住者で土地を持っているのはわずか3人であり，あとは町外地主ということになる。また杉村甚兵衛のような新興の織物問屋がこの町の土地を積極的に取得したことは，杉村の店がすぐ近くの新材木町にあったという関係以外に，新乗物町が他に比較して地価か安く，それでいて新しい織物問屋の街になるという期待感があったからだといえるのではあるまいか。殊にこの町の北側の部分は，表通りに木綿問屋の旧家升屋（久須木）が，また15番地には「丁吟」の土地があったことは注目してよかろう。事実，明治13年には，すでに掲げた表2－1のように，表通りに唐物商2軒が店を開くに至っている。特にその中で白石甚兵衛商店は後にモスリン問屋の大店に成長するが，杉村はこの同業者の発展に尽力する。それは杉村にとって競争者の出現というよりは，モスリン市場の創出と拡大がなによりも必要な時期にあったからにほかならない。

この新乗物町は図のように道路をへだてて南北の部分に分かれている。図の右側（南）は背中に岩代町を背負っているが，左側（北）は両面に道路をもち，特に堀留町3丁目との境にある道は堀留川の萬橋を経て，堀江町・小舟町に通ずる。従って，地価もこの南北では自ら異なり，北側の方が高い。この地価については，明治11年の「東京地所明細」をみると[29]，町別・地番別に等級が載っている。ただ，その地番は明治9年後間もなく改正され，明治45年とほぼ同じであるので，図3－2の地価表はこの地番で示しておいた。これによって，この町の南・北の地価の相異はもちろんのこと，人形町通りに面しているところが高く評価されていることがわかろう。即ち，表通りの16番地とその後の14番地では地価が2倍も違うのであった。しかし，全体としてこの町の地価をみると，他の界隈と比較し，やはりこの時期にはまだ低位にあり，すでに述べた江戸時代と左程変りはない。これが次第に変ってゆくのは，明治中期以後である。特にこの人形町通りに，明治36年，市電が通り，本町通りでなく今日の江戸通りに市電が走るに至って，こうした状況は大きく変わっていった。図3－3は人形町通りに面した各町の表通りの地価を，明治11年と大正4年について比較したものである[30]。これによると，大正4年には本町通りとの四つ角（A点）のそれはやはり高いが，それよりも田所町と堀留町との通りの四つ角（B点）の方が高くなっている。そして全体として，明治11年頃とは違い，地価の差がそれほどひらかず均一化の傾向がみられよう。これは市電が通り，

29）明治11年9月『東京地所明細』上，尚玄堂蔵。
30）前掲『日本橋区史』第1冊。

図３－２　明治11年新乗物町地価
（○の数字は地価等級）



等級・100坪当り地価

	円 銭		円 銭
㉜	1,147,50	㊼	535,50
㉞	1,079,25	㊽	519,00
㊶	872,25	㊺	419,25
㊻	748,50	㊸	328,50
㊿	663,00		

「東京地所明細」地価表より

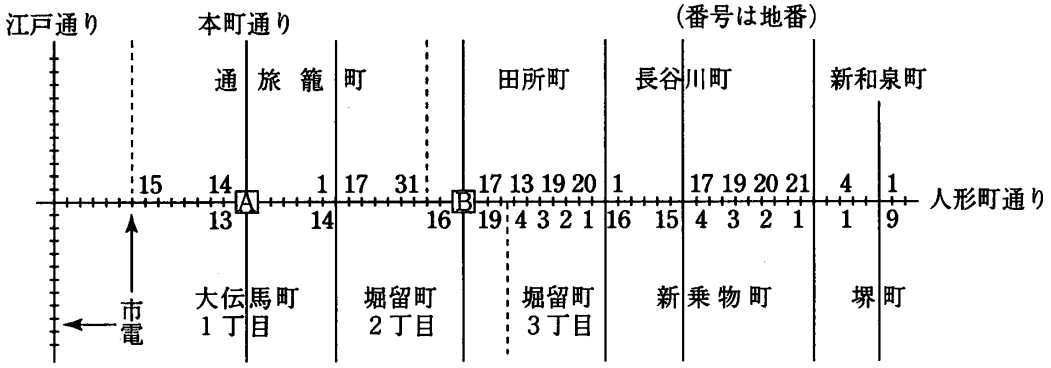
図３－３　人形町通り地価表と地番図示

（銭切捨）

町名	地番	明治11年	大正４年
大伝馬町１丁目	13	1,872 円	5,400 円
	14	1,219	4,150
堀留町２丁目	16	1,510	5,800
	19	1,147	5,800
堀留町３丁目	4	771	4,150
	3	795	4,150
	2	748	4,150
	1	795	4,450
新乗物町	16	1,079	4,600
	15	1,147	4,600
	4	663	4,000
	3	748	4,000
	2	748	4,000
	1	872	4,160
堺町	1	1,182	4,800
	9	927	4,150
通旅籠町	15	605	2,800

町名	地番	明治11年	大正４年
通旅籠町	14	1,377 円	5,400 円
	1	1,464	5,400
	17	846	3,700
	31	899	4,300
田所町	1	1,079	5,600
	17	927	5,600
	13	683	3,700
	19	795	4,300
	20	846	4,800
長谷川町	1	1,377	5,000
	17	795	3,700
	19	846	4,000
	20	846	4,000
	21	846	4,600
新和泉町	4	605	4,800
	1	704	4,300

明治11年地価前掲，大正４年「日本橋区史」より



人形町―堀留町―小伝馬町という停留場ができたことと，すでに述べたように，この一帯に織物問屋が群生して，以前は織物問屋といえば大伝馬町というイメージが，織物問屋＝堀留というように変ったことなどが投影したものといえよう。

明治期後半から新乗物町には表２―２の如く沢山の商店ができ，土地の所有者も変ってゆく。図３―１の右側の明治45年地籍台帳をみると次のようである。３番地には第十五銀行が日本橋支店を開き，４番地の１部も所有しているが，７番地の地主は酒の仲買卸の富商鹿島利右衛門夫人千代であった。鹿島千代は東京に当時49ケ所，特にここを含めて20ケ所も日本橋界隈に土地を持つ資産家として知られていた。８番地は表通り15番地に土地と店を持つ新興モスリン問屋白石甚兵衛が購入して自宅（控屋という）としていたところである。北側では９番地が綿糸商の加藤福松，11番は新材木町の木綿問屋の大店，西沢善七夫人のぶ名儀で，12番地には「丁吟」の小林合名，14番地１は表通りとつきぬけで白石甚兵衛商店が所有し，その２は呉服店の吉岡宇一郎が，その３は同じく呉服屋の上総屋吉岡英三郎がそれぞれ所有していた。表通りといえば，16番地の角地の地主は薩摩治兵衛であった。薩摩治兵衛については筆者も度々紹介してきたが，[31] もとは丁吟（小林吟右衛門）の大番頭であったが，慶應３年に，幾内の木綿仕入のことで主人と意見が対立し，退店別家し，同じような経験をした杉村が資金援助で，輸入金巾の仕入と販売を開き，遂に和洋木綿問屋として成功し，明治32年には東京の主要織物問屋100店のうちで売上１位にランキングされた近江の「希代の豪商」であった。[32] そして，その二代目治兵衛の妻は杉村甚兵衛の長女であるように，杉村との関係は深い。この薩摩の土地に店を開いたのが，白石甚兵衛の妹婿で分家し綿ネル問屋，白石彦太郎商店である。こうしてみるとこの新乗物町には，地主であったり店をもったりした商家がお互いになんらかの関係をもつ一種の「お仲間」であったといえるでろう。

もう１つのこの町の特色は11番地の西沢の土地に「織物問屋組合」の事務所があったこと，また南側の新材木町との境に合名会社「モスリン商店」があったことである。特にこのモスリン商店は，明治22年にモスリン市況の悪化によって問屋が軒なみに危機に瀕した所に，その対策として杉村や堀越角次郎の主唱によって設立された問屋仲間の匿名組合で，各問屋の手持ちの色モスリンを買取り，市場での値段の暴落を抑えようとするものであった。実際，その当時，市場で20％以上の損失が発生するところ，５％にとどまるを得たという。[33] その意味からいっても，この新乗物町という町は，モスリン問屋の仲間からみて特別な意味を持っていたに違いない。

さて，最後に，この新乗物町の土地所有について，他の町と比較した特徴にふれてみよう。それは「町内地主比」である。図３―４はこの界隈24の町について，その町の地主のうちで，そこに住

31）白石孝『明治期の洋反物輸入と東京織物問屋―時代と商人の経営史』前掲誌 pp.82-84。
32）藤川助之編『滋賀県豊郷村史』村史編集委員会，昭和32年。
33）杉村友次郎『登翁伝』杉村，昭和元年，p.14.

図3－4　町内地主比

明治9年→明治45年

M9=地主名鑑
M45=地籍台帳

	小伝馬一丁目 1/9 → 2/9	小伝馬二丁目 4/14 → 5/10	小伝馬三丁目 1/18 → 2/17	
大伝馬一丁目 1/17 → 3/12	大伝馬二丁目 3/28 → 5/19	通旅籠町 4/19 → 6/10	通油町 7/21 → 5/20	
堀留一丁目 1/7 → 1/5	堀留二丁目 1/15 → 3/12	田所町 7/28 → 16/29	新大坂町 0/9 → 3/9	元浜町 2/11 ↓ 6/11
新材木町 7/14 → 10/17	堀留三丁目 0/5 → 1/4		弥生町 0/5 → 1/6	
	新乗物町 2/13 → 7/14	長谷川町 7/13 → 5/8	富沢町 9/23 → 15/26	
	岩代町 1/1 → 0/1			
葺屋町 7/8 → 7/11	堺町 1/4 → 0/3	新和泉町 2/7 → 2/6	高砂町 3/14 → 2/13	
	芳町 3/11 → 2/11			
新葭町	元大坂町	住吉町	浪花町	

んでいる地主の数の比である。そこでは明治9年と明治45年のその変化を示している。これをみると，古くからの問屋街である小伝馬町，大伝馬町，通旅籠町，通油町，それに堀留町はまずもってその比が小さい。つまり，町外地主が依然として土地を所有し，町の商店の大部分は借地・借家である。これに対して他の町々は，明治になり次第に新興問屋が増え，店の土地を取得するものが増加したことを反映して，町内地主比率は高くなってゆく。これは田所町，富沢町，長谷川町，新材木町，更にここで取り上げている新乗物町に見られる現象である。ここにこの界隈における新旧の町の姿がうかがえるといってよかろう。もう1つは分母に示される地主の数そのものの増減で，大伝馬町や堀留町では明治年間に減少をみせるが，これは所有地面積の拡張取得の結果を示すものであろう。これに対して新材木町や富沢町は分割化が進んだ結果，地主の数そのものが増えているとみられる。そして，これらの町内地主をみると，その大部分が木綿・絹・呉服，金巾，モスリンのような織物問屋であったことはいうまでもない。

それではこのように発展をみせた新乗物町は大正にかけてどのような街並みの町になったであろ

表3－1　新乗物町商店一覧（大正7年）

北

地番	商店名
16	栖原文之助木村屋質店
16	白石彦太郎綿ネル商
15	吉岡伊三郎上総屋呉服店
15	白石甚兵衛松屋洋織問屋
14	市田文次郎京呉服帯地
13	杉村商店毛糸店
13	藤倉彦七金巾裏地卸
12	川口繁次郎風呂敷卸
12	立川利平綿ネル仕立卸
12	牧田源太郎洋織物仲買
11	寺島五兵衛金巾卸
11	捺染商工業連合
11	東京織物問屋同業組合
11	山郷豊次郎毛織物卸
10	金子熊吉魚店
10	松本雷風画家
10	沢田政七金巾商（丁子屋）
10	瀧川忠次郎洋反物商
9	辻村仁三郎文庫紙問屋
9	加藤福松染糸卸

南

地番	商店名
1	越塚金之助万安料理店
2	大川吉兵衛伊勢屋帳簿店
3	十五銀行日本橋支店
4	木島福太郎かめや糸店
4	野村清兵衛めりんす店
4	関勘七洋傘絹ショール店
4	加瀬萬吉玩具店
4	山中忠兵衛呉服店
4	藤縄金次郎煎餅店
4	勝川文吉際物商
4	髙島福太郎洋品店
4	渡辺吉次理髪店
4	谷回春堂売薬店
4	髙梨万造米店
4	加藤政治郎柔道着卸
5	桑原惣助スミ製造
5	倉庫運輸会社
6	青木岩吉洗張
6	川崎房次郎木綿織物卸
7	甲斐義雄和服裁縫業
7	荒井ヤス揉療治
8	佐藤佐吉呉服太物卸
8	大竹久次木箱製造
8	吉川合名東京出張所呉服
8	摂津ゴム東京出張所

大正7年「日本各種営業者姓名録」より作成，業種名原文のまま
（表通りから南北に分けて記載）

うか。表3－1は大正7年のこの町の商店である。[34] 実に45店に及ぶ。表では南側と北側とに分けておいた。これによっても，南側と北側の店の種類が異なることがわかるが，町全体をみるとき，ここは単なる織物問屋街ではなく，下町の生活コミュニティーにあふれた典型的な明治・大正の「町内社会」の町といってよいのではあるまいか。このコミュニティーが崩れるのは大正大震災後のことである。

次号ではこの新乗物町と表裏一体の街というべき「新材木町」について記しておきたい。

ここに福島義久君の夭折を惜しみ，心から哀悼の意を表する。

34）大正7年『日本各種営業者姓名録』（日本橋）啓新社，大正7年。